

基本となる考え方

人の行動は目による確認から出発するとされており、視覚情報を見誤ることは移動時の危険性や負担の増大を招く可能性がある。転倒などの危険に直結する部分の錯視や、案内誘導施設等の見落としなどを避けるために、高齢者や弱視者の視覚機能の特性に配慮した色彩計画に心がける必要がある(62)

共通事項

- 建材や案内サイン等の視認性に配慮して、輝度比は、弱視者にとって見分けが付き、晴眼者にとって煩雑さを感じない範囲である 1.5 から 2.5 の組み合わせ(晴天時)となるように計画する。
- 高齢者の視界は、加齢による水晶体の黄変化により黄色のフィルター越しに見ているようになることを考慮し、「青と黒」「黄と白」等の極めて識別が困難な組み合わせは用いない。

施設・構内等

- 階段や段差の生じる箇所は、見下ろした場合に識別しにくいので、段鼻とその周辺部分及びスロープ付き階段のスロープ部分とその周辺部分との色のコントラストを確保して認識しやすくする。
- 踏面と蹴上げの色の対比により奥行きを認識できるようにし、踏面を明るくし段鼻を暗くする等の配慮をする。
- 単色では認識しやすい色も、配色によっては認識しづらい場合もあるので注意する。
- スロープの勾配部分は、それに接続する平坦部とを容易に識別できる配色とする。
- 床に対する壁の立ち上がり部分は、配色により奥行きが認識できるよう配慮し、同素材で仕上げる場合には巾木により境界を明確にする。

案内図・サイン

- 地色と図色のコントラストに注意し、明度差 5 段階以上を確保して明確に示す。
- 文字が地色より区別されはっきり目に飛び込んでくるためには、視認性を超えて良く解読できる可読性が求められるため、加齢黄変化後も輝度比が 5.0 以上になるものを選択することが望ましい。
- 地図などの案内図に用いる色は、色数が増えると煩雑になるため多くの色を用いないこととし、退色を考慮した色とすることが望ましい。
- 以下の点にも留意して材質等を選択する。
 - ・照明グレアによる読みにくさ
 - ・背景物が透けないこと
 - ・風景が入り込むことを避ける